

【熊本県賞】

水の恵み

熊本県 熊本信愛女学院中学校

三年 岡村 咲希

「ぴちゃっ」
その瞬間、私の足に冷たい感触が走った。これが本当の水なのだった。

私は去年の夏休みに少し涼みにいこうと菊池溪谷に父と弟と行った。熊本市内は太陽が容赦なく照りつけ、三十五度以上の猛暑だった。しかし、菊池溪谷の付近まで行くと、同じ県とは思えないようなひやりとした冷気を感じた。私はとても驚いた。それから溪谷の中の道をしばらく歩き、川の中まで入れる場所まで行った。私はサンダルのまま川に足を踏み入れた。とても冷たかった。三分以上つかつていれば、足の感覚を失うほどだった。同時に、自然の水はこんなにも冷たくて、澄んでいるのだと感動した。大きな岩からザーザーと音を立って流れてくる水は、やがて下流のほうで川の流れになっていて、その中の石やこげが見えるほどきれいに澄んでいた。私はこのことから、世界中の水がこんなにきれいで安全な水なら良いなと思った。

世界的に水の汚染は大きな問題となっている。特にアフリカではその影響が深刻で一日に八百人もの人々が水が原因で亡くなっている。安全な水が手に入らない地域では、生きるために不衛生な水でも飲まなければならず、子どもや女性は一日のうち何時間も水くみに時間を費やさなければならぬのだそう。これらの重労働や汚染された水によって起こる病気が原因で命を落としてしまうケースもある。私はこのような世界の現状を知って、蛇口をひねるだけできれいで安全な水を飲む私たちがどれだけ幸せなのだろうと痛感した。だからこそ、私たちは今ある資源を大切に、安全な水を飲めない人たちのために、できることをしなければいけないと思った。

私の通っていた小学校では、毎年「ユニセフ募金週間」というもの

があり、企画委員会という委員会が一週間ほど各クラスに呼びかけてユニセフ募金を集めていた。私は六年生に初めて企画委員会になって、実際に募金活動もした。集計も自分たちですることになっていて、本当にたくさんの方が募金をするとこんなに集まるのだと感動した。こうした活動がもっと増えて、世界中の水に困っている人の生活が少しでも楽になればいいなと思う。

水は、私たちにとって必要不可欠なものだ。朝起きてから夜寝るまでに一度も使わないということはないと思う。特に、今は新型コロナウイルスによって、手洗い・うがいが必須な世の中だからこそ、「水」という資源のありがたみを感じて生活しなければならぬと思う。私は今まで当たり前前にきれいな水を飲む環境で育ってきたけれど、世界には汚い水でも生きていくために飲んでいる人がたくさんいると知った。世界中の誰がどこに行ってもきれいな水を安心して飲んで、笑顔で生活できるように、水の恵みに感謝して自分たちにできることを積極的にしていきたい。